

ケチュア語の現状

—地域差、変容、教育

神戸夙川学院大学観光文化学部准教授 蝦名大助

【目次】

1. はじめに
2. ケチュア語の地域差
3. 社会の変化と接触によるケチュア語の変容
4. 教育と言語保持
5. おわりに

1. はじめに

南米アンデス地域では、近年の社会の変化に伴い、先住民人口の中でスペイン語とのバイリンガルの割合が増えている。同時に、先住民語の話者数そのものが減少している。またスペイン語との接触機会の増大に伴い、先住民語の文法体系に対するスペイン語の影響が増している。本稿では、先住民言語の1つであるケチュア語が支配言語であるスペイン語との関係からみて現在どのような状況にあるのか、地域による違いや社会的な背景、教育との関係も視野に入れながら述べる。

スペイン語とケチュア語は新大陸にスペイン人がやってきてから約500年間接触状態にあり、そのことはスペイン語とケチュア語双方に影響を与えてきた¹。ケチュア語に対する影響は比較的近年まで軽微であり、語彙の借用や音韻体系への影響にとどまっていたと考えられる。しかし近年は形態や統語面への影響も見られる。

ケチュア語はアンデス地域の広い範囲に分布しており、内部の言語差が大きい。地域によって接

触の仕方も異なる。結果としてもたらされる変容も異なる可能性がある。接触によるケチュア語の変容を扱う際にはこの点にも注意しなければならない。

さらに、社会的状況の一つとして、教育にも注目する必要がある。これまで学校教育は先住民言語の保持にはあまり役立ってこなかった。しかし最近、ペルーやボリビアでは先住民言語教育の推進が唱えられ、国家的に制度が整えられようとしている。ところが、教育制度の構築には、上で述べたようなケチュア語内の方言差への対応など様々な問題がある。教育によって話者数の減少に歯止めをかけることができるのか、ケチュア語の変容に教育がどのように影響する可能性があるか、についても考察したい。

2. ケチュア語の地域差

スペイン語の影響について考察する前に、本節でケチュア語の地域差について述べておく。

ケチュア語は、ペルー、ボリビア、エクアドルのアンデス地域を中心に、北はコロンビアの一部、南はアルゼンチンの一部にまで分布している。話者数は研究者によって挙げる数字に多少の差はあるが、5~600万人程度と推計される²。一般にケチュア「語」と呼ばれるが、1960年代以降に広く記述的研究が行なわれるようになったことにより、内部的な差異が大きい、ということが分かってきた。そのため現在では、同系の言語群からなるケ

¹ スペイン語に対するケチュア語の影響についての研究については、Adelaar (2004: 589-602) にまとめられている。

² 多くの研究者は、これよりやや大きな数字を挙げる。例えばAdelaar (2004: 168)は800万人という数字を挙げている。しかし近年の話者数減少から、筆者には5~600万人という数字が実情に近いと思われる。

チュア「語族」(Quechuan language family)とされることが一般的である(細川 1988、Mannheim 1991、Adelaar 2004 など)。

内部を大きく2つのグループに分けることで、多くの研究者は一致している。すなわちペルー中央部で話されるグループ(Torero の分類では Quechua I、Parker の分類では Quechua B)と、それ以外の地域で話されるグループ(Quechua II もしくは Quechua A)である。2つのグループでは相互に通じないほど差異が大きい。

従来、研究者の関心はそれぞれの変種(variety)がどのように歴史的に分岐してきたかということが中心であった。しかし、地域によっては基層言語(substratum)の影響もみられる。例えば、後述するエクアドル・ケチュア語の場合、ケチュア語が広まる以前にこの地域では別の先住民語が話されており、ケチュア語化する際に、基層となった先住民語の影響があったと考えられている³。アマゾン地域で話されるケチュア語にも同様のことが言える。また、ケチュア語全般について、アイマラ語との長期にわたる接触があったとされているが、特に南部ではアイマラ語の影響が大きいと考えられている。

ケチュア語間の差異の大部分は語彙面や音韻面に見られ、文法的な差異は小さいと考えられていた。しかし実際には無視できない差異がある。以下に、同じ II グループに属するエクアドル・ケチュア語(EQ)とクスコ・ケチュア語(Cusco⁴ Quechua, CQ)の例を挙げる⁵。

³ さらに Muysken (2009) は、長期にわたって文法の単純化が起こったと考えている。

⁴ Cuzco と表記されるが、現在公式の表記は Cusco となっているため、これに従う。なお、z が古い s 音を表しているとみて、あえて Cuzco という表記にこだわる研究者も見られる。

⁵ I グループと II グループとでは、II グループのほうが内部の言語的な差異が小さいと考えられている。

(1) miku-na muna-ni (EQ)
eat-NMLZ want-1
(Muysken 1981 p.56)

(2) miku-y-ta muna-ni (CQ)
eat-NMLZ-ACC want-1

(1)(2)はどちらも「食べたい」という意味を表す。エクアドル・ケチュア語とクスコ・ケチュア語とでは、i) 異なる名詞化接尾辞が用いられている点、ii) クスコ・ケチュア語では名詞化動詞に対格接尾辞が付くが、エクアドル・ケチュア語では付かない点、が異なっている。一般にケチュア語では、主語以外の動詞補語が格接尾辞をとらないことはない。したがって、エクアドル・ケチュア語のこの構文は、エクアドル・ケチュア語独自の革新だと考えられる⁶。

このように、同じケチュア語でも地域によって統語的(あるいは形態的)に異なる面があることから、スペイン語との接触による変容の結果も異なるものになる可能性があることに注意する必要がある⁷。

話者数にも地域により差がある。最も多いのがクスコ・ケチュア語である。クスコ・ケチュア語を中心として、隣接するアヤクチュョ(Ayacucho)・ケチュア語、ボリビア・ケチュア語など、ペルー南部からボリビアにかけての地域で話されるケチュア語は、スペイン語の影響が無視できなくなっているものの、いまだ一定の活力を保っているといつてよい。これに対し、ペルー中部ではケチュア諸語の話者数が急激に減少してきており、活力が失われつつあるようである。Sanchez (2003) が

⁶ その他、所有構文などにも違いがある(Adelaar 2004: 594)。

⁷ Muysken (2009: 85) は、"EQ ... has undergone littule structural influence from Spanish." と述べている。(1)(2)に見られるクスコ・ケチュア語とエクアドル・ケチュア語の文法的な違いがスペイン語の影響によるものとは考えにくい。

指摘するような劇的な変化は(3節で取り上げる)、このような状況で起こっていると考えられる。

3. 社会の変化と接触によるケチュア語の変容

スペイン語によるケチュア語への影響を扱った研究は、ケチュア語を含む先住民語がスペイン語に与えた影響を扱った研究に比して少ない。スペイン人がアメリカ大陸にやってきた当初、スペイン人の数は先住民に比べて非常に少なかった。そのため、先住民がスペイン語化していく際に、基層言語となった先住民語の影響があったと考えられる。これに対し、先住民語への影響としては、かつては軽度な接触による借用と、それに伴う音韻の一部に対する影響のみを考えればよかったと思われる。すなわち、多くの地域では近年まで目立った影響が見られなかったと考えられる。しかし近年では、二言語併用状態の急速な広がりとともに、先住民語への影響が無視できなくなっている。

本節ではまず 3.1.で、スペイン語の影響が無視できなくなっている先住民社会の変化について述べる。次に 3.2.で、クスコ・ケチュア語にどのような変化が起こっているかを見る。最後に 3.3.で、他地域の事例として Muysken (1981, 1997) と Sanchez (2003) を取り上げ、これらの研究が指摘する変容とクスコ・ケチュア語に見られる変容との違いについて考察する。あわせて、社会的な状況の違いについても述べる。

3.1. 社会の変化

近年、先住民コミュニティにおいてスペイン語の存在感がますます増してきている。ここではこのような状況を引き起こす社会の変化について、ペルーにおける状況を述べる。

ペルーにおいて先住民人口とスペイン語との接触機会が増えたのは、1970年ごろに大土地所有制が廃止されたことがきっかけだと考えられる。

それまでアンデス先住民人口の多くは、アシエンダ(hacienda)に縛り付けられていた。アシエンダには領主(hacendado)がおり、先住民は、半ば奴隷のような状態におかれていた。教育へのアクセスも認められないことがあったという。そのため、現在60代以上のケチュア語話者には、スペイン語との接触機会がほとんどなかった者が多くいると考えられる。そのため、モノリンガル話者も多く見られる。

この農地改革をきっかけに、ペルーでは1970年代以降、都市への人口流入が起こった。また、アシエンダから解放されたことから、教育へのアクセスも徐々に増えたと思われる。

1980年代になり、ペルーはテロの時代に入る。アヤクチョ県ではテロリストに従わない先住民の虐殺も起こった。そのため、一部の地域ではこの時代に都市部に移住した者も多いと考えられる。

しかし、70年代から80年代にかけての状況だけでは現在起こっている言語接触のすべてを説明することはできない。先住民の中には農村部にどまったものも多く、また、領主から解放されてもなお、教育を受けない者もいたからである。現在でも、30代以上の女性には、教育をあまり受けておらず、スペイン語を話せない者も見られる。

現在見られるような接触機会の増大には、90年代以降に行なわれたインフラの整備が大きく影響しているように思われる。すなわち、道路が整備されたことにより、農村部から都市部へのアクセスが容易になったこと。その結果、都市部の住民との接触機会が増え、また、先住民の子弟が中等教育を受ける機会が増えたこと。都市部に定住した先住民が、農村部に一時的に戻る際にスペイン語を持ち込むようになったこと。電力網が整備されたことによりラジオ放送を聴く機会が生まれ、その点でもスペイン語との接触機会が増えたこと、などが挙げられる。

しかし一方、Adelaar (2004: 258)によれば、ペルー中部では、南部よりも早くから先住民人口の

スペイン語化が進んでおり、いくつかの変種は消滅の危機にあるという。同じ国内でなぜこのような違いが見られるのか、要因の一つとして、元々の話者数の違いが挙げられるだろう。すなわち、クスコ・ケチュア語など南部ケチュア語は元々話者数が多かったが、中部ではそうではなかったと考えられる。また、別の要因としてクスコ・ケチュア語の特殊性が挙げられる。クスコはインカ帝国の首都であり、そこで話されるケチュア語は、「最も正統である」として喧伝されてきた。クスコ・ケチュア語が話される地域でも、先住民の多くが、自分たちの子弟にはスペイン語を話してほしいと考えており、必ずしも言語の継承を望んでいない。しかし、都市部を中心に、ケチュア語を守らなければならない、と考える人々がいることも事実である。ケチュア語はスペイン語に対して *prestige* が低い、同じケチュア語内では、クスコ・ケチュア語は相対的に *prestige* が高いのかもしれない。

3.2. クスコ・ケチュア語における変容

3.2.1. 音韻

3.2.1.1. 子音：有声閉鎖音

スペイン語からケチュア語には、家畜名など様々な借用語が入っているが、初期の段階では、借用語は完全にケチュア語の音韻体系に沿った形で取り入れられていた。

(3) Sp.: vaca [baka] > Q: waka [waka] 「牛」

一般にケチュア語には有声閉鎖音がないため、スペイン語の有声閉鎖音はケチュア語では別の音素に置き換えられて借用されていた。たとえば(3)に見られるように、[b] は /w/ で借用されていた。しかし現在では有声閉鎖音はそのまま借用される。

(4) Sp.: valer [baler] >

Q: bali- [bali] 「価値がある」

(5) Sp.: guardia [gwardja] >

Q: wardiya [wardija] 「ガードマン」

(4)ではスペイン語の [b] がそのまま [b] で、(5)では [d] がそのまま [d] で借用されている。これらはスペイン語を話さない話者にも観察される、比較的古い変容である。なお、(4)では [e] は /i/[i] として借用されている。また(5)では [gwar] は語頭の g が脱落して /war/ として、[dja] は /diya/ という二音節と解釈されて借用されている。これらはいずれも、ケチュア語の音韻体系に沿った形での借用である。以上、モノリンガル話者にも見られる点と、他の面ではケチュア語の音韻体系が保たれている点から、(4)や(5)はケチュア語に定着した借用語であると見られる。よって、新しい音素として /b/ /d/ /g/ を認める⁸。

他にケチュア語にはない子音として、f 音がある。スペイン語の f 音は古くは /ph/ で借用されていたが、現在では f で借用されることが多いように見受けられる。しかし新しい音素として f 音を認めるべきかどうかは、データが少ないため明確なことは言えない。

3.2.1.2. 母音

クスコ・ケチュア語は、他の多くのケチュア語と同様に、/i/ /a/ /u/ の3つの母音音素を持つ。これに対し、スペイン語は /i/ /e/ /a/ /o/ /u/ の5つの母音を持つ。(4)に見られるように、従来、スペイン語の母音 /e/ [e] は /i/ で、/o/ [o] は /u/ で借用されていた。すなわち、スペイン語の [i] と [e] が合流して /i/ として、[u] と [o] が合流して /u/ として借用されていた。しかし近年では、そのままの形で発話されることもしばしば観察される。アイマラ語とケチュア語の話し手であり、言語学

⁸ Weber (1989) も、ペルー中部で話される Huallaga Quechua において /b/ /d/ /g/ を認めている。

者でもある Teófilo Layme 氏は次のように述べている。

「昔は *ventana* [bentana] (「窓」) のことを [wintana] と言っていたが、やがて [bintana] と言うようになり、最近では [bentana] と言うようになった⁹。」

多くのケチュア語話者において、[i] [e] の合流、[u] [o] の合流が見られなくなっているものの、混同が完全になくなったとはいえない。同様に、スペイン語の二重母音についても、そのままの形と単母音に置き換えられた形とが見られる。母音に関しては、ケチュア語の音韻体系が完全に変化したとはいえない。

以上、音韻についてまとめると次のようになる。

i) かつては、スペイン語からの借用語は完全にケチュア語の音韻体系に沿った形で取り入れられていた。

ii) スペイン語の有声閉鎖音がそのまま取り入れられるようになった。これはもはやケチュア語における新しい音素として認めざるをえない。

iii) 母音については、まだ完全に取り入れられたとはいえない。

iv) 音節構造も変化したとはいえない。

3.2.2. 形態

名詞複数接尾辞 *-s* の借用が見られる。

(6) *wawa-s-kuna*¹⁰

child-PL-PL

「子供たち」

そして興味深いことに、(6)のようにケチュア語の複数接尾辞 *-kuna* を伴って現れることがある。

⁹ Ebina (2012)に対するコメント。

¹⁰ *kunas* という順序も可能かもしれない。しかしこの場合、*s* が複数接尾辞ではなく伝聞を表す clitic であるという解釈を排除できない。

このような例は *double plural* と呼ばれ、アフリカなど他地域での言語接触でも観察されている¹¹。

ただし、指摘しておきたいのは、スペイン語の *-s* とケチュア語の *-kuna* が全く等価ではないかもしれない、ということである。すなわち、スペイン語の *-s* は義務的であって、指示対象が複数の場合、必ず付加しなければならない。*-s* が付加されない場合、指示対象が単数（もしくは数えられない）であることが含意される。しかしケチュア語の場合、*-kuna* の付加は義務的ではなく、*-kuna* が付いていない場合、指示対象が複数であるかどうかは明らかではない。つまり *-s* と *-kuna* が全く同じ意味を表しているとはいえない可能性がある。

3.2.3. 統語

3.2.3.1. 前置詞

スペイン語は動詞と補語との関係を主に前置詞で表し、ケチュア語は格接尾辞で表す。ケチュア語には前置詞はない。前置詞の借用はほとんど観察されないが、唯一の例外として *hasta* 「まで」がある。

興味深いことに、*hasta* は同じような意味を表す格接尾辞を伴った名詞句に先行して現れる。

(7) *hasta* ukhu-mañ

till inside-DAT

「中まで」

(7)では前置詞 *hasta* と予格 *-mañ* はどちらか一方が現れていれば良さそうなものであるが、両者が共に現れる例が観察される¹²。(7)のような前置詞句は、ケチュア語にはなかった新しい統語構造である。

¹¹ Winford (2004)などを参照。

¹² *hasta* N-kama (*-kama* は「まで」を表す格接尾辞) という組み合わせも観察される。

現在のところ、前置詞の借用は *hasta* 以外では観察されていない。今後、どのような前置詞が借用されていくのか、あるいはされないのかが注目される。

3.2.3.2. 接続詞と従属節

中南米の多くの先住民語について、スペイン語からの接続詞の借用が報告されている。ケチュア語については、Muysken (1997: 371) が、エクアドル・ケチュア語における *i* (スペイン語 *y* 「と」) と *piru* (スペイン語 *pero* 「しかし」) の借用を報告している。しかし筆者の知る限り他のケチュア語ではこれまでそのような報告はなかった。

クスコ・ケチュア語では条件を表す節を導く接続詞 *si* 「もし」の借用を観察できる。

- (8) [sichus pay hamu-**ŋqa**],
if s/he come-3.FUT
mikhuna-ta mikhu-chi-saq.
food-ACC eat-CAUS-1.FUT
「もし彼(女)が来たら、
私は食べ物を食べさせる。」

スペイン語の接続詞 *si* は、*sichus* という形で借用される。ここで注目しなければならないのは、従属節中の動詞が定動詞 (finite verb) で現われていることである。本来ケチュア語では、従属節中の動詞は(9)のように非定形 (non-finite form) で現われなければならない。

- (9) [pay hamu-**qti-ŋ**],
s/he come-ADV LZ-3
mikhuna-ta mikhu-chi-saq.
food-ACC eat-CAUS-1.FUT
「もし彼(女)が来たら、
私は食べ物を食べさせる。」

(9)では従属節中の動詞は非定形動詞の1つであ

る副詞化動詞 (adverbialized verb) で現われている。(8)に見られるように、スペイン語の接続詞の借用は、単に接続詞という新しい文法範疇を導入するだけでなく、文法の他の部分にも影響を与える可能性がある。Muysken (ibid.) の挙げる *i* と *piru* は等位接続詞であり、従属節を導く接続詞ではない。つまり、クスコ・ケチュア語における *sichus* の借用のように、従属節構文にまで影響を及ぼす借用は、他のケチュア語では報告されていない新しい変化だと考えられる。

3.3. 他地域の事例

3.3.1. Media Lengua

ケチュア語に対するスペイン語の影響を扱った研究としてよく知られているものに、Muysken による Media Lengua の研究がある (Muysken 1981, 1997)。Media Lengua はエクアドルで話されており、Muysken によれば、「語彙がほぼスペイン語に由来するが、多くの点でケチュア語の意味構造・統語構造を保持している」¹³。次のようなものである。

- (10) dimas-ta llubi-pi-ga,
too.much-ACC rain(v.)-ADV LZ-TOP
no i-sha-chu
NEG go-1.FUT-NEG
「雨が降りすぎたら、私は行かない。」

すなわち、語幹はすべてスペイン語から来ているが、接尾辞や統語構造はケチュア語のものである。(10)では、*dimas*、*llubi*、*no*、*i* がそれぞれスペイン語の *demás*、*llover*、*no*、*ir* に由来する。一方、接尾辞 *-ta*、*-pi*、*-ga*、*-sha*、*-chu* は本来のケチュア語のものであり、統語構造もケチュア語のそれである。また Muysken (1997) によれば、

¹³ “Basically, it is Q(uechua) with a lexicon almost completely derived from Sp, but which to a large extent preserves the semantic and syntactic structures of Q.” (Muysken 1981: 54)

エクアドル・ケチュア語は、指小辞の借用やいくつかの接続詞の借用などの点でスペイン語の影響を受けているが、文法に対する影響はあまり大きくないという¹⁴。Media Lengua についても、文法に関してはスペイン語の影響はあまり大きくないようである。語彙面では多大な影響を受けていながら、文法面の影響は大きくないという点で、クスコ・ケチュア語とは異なる変容が見られる。

Media Lengua はエクアドルのいくつかの地域で話されているとされているが¹⁵、同様の事例はエクアドル以外では報告されていない。このような言語が生まれてきた背景には、特殊な社会的状況があるようである。すなわち、Media Lengua が話される村は、都市の「白人」社会と近隣の先住民社会との中間に位置しているという¹⁶。そのような共同体において、Media Lengua はグループのアイデンティティを示す役割を果たしているようである。このような「中間的な」位置付けの共同体は、筆者が調査を行なっているクスコ・ケチュア語地域では見られない。「白人」社会でも先住民社会でもない中間的な社会が存在し、またそのアイデンティティを表す独自の言語が発達したという点で、Media Lengua は特異な事例と言える。

¹⁴ “Only a few aspects of the grammar have been influenced by Spanish. Morphological and syntactic influence of Spanish on Quechua appears to have been rather slight” (Muysken 1997: 369)

¹⁵ “spoken in various parts of Ecuador” (Adelaar 2004: 602)

¹⁶ “The villages where Media Lengua is spoken are socially and geographically intermediate between the *blanco* world of the urban centers in the valleys and the neighboring Indian world of the mountain slopes... In the communities, Spanish is the language of contacts with the non-Indian world and of the school, Quechua is the language of tradition and of contacts with the Indian campesinos higher up the slopes, and Media Lengua is the language of daily life within the community.” (Muysken 1997: 374-375).

3.3.2. Sanchez (2003)

Sanchez (2003) は大規模な二言語併用の結果として起こっている変化について扱っている。Sanchez (ibid.) は、ペルー中部で話されるウルクマヨ (Ulcumayo) ケチュア語とラマス (Lamas) ケチュア語において、“functional convergence” が起こり、バイリンガル話者の話すケチュア語とスペイン語が非常に似通ったものになってきていると指摘している。そして特に、語順と、対格接尾辞 *-ta* の脱落を指摘している。以下にラマス・ケチュア語の例を挙げる。

- (11) *chay niñito apunta-yka-n*
that child point(v.)-PRG-3
chay sapito.
that toad

「その子はそのヒキガエルを指差している」

(11)では、いわゆる目的語に相当する *chay sapito* が何も格接尾辞が付かない形で現われているが、本来であれば対格接尾辞 *-ta* が付かなければ非文法的である。筆者の知る限り、主節において対格接尾辞 *-ta* の脱落が許容されるのは、Sanchez (ibid.) の指摘する例以外にない¹⁷。また語順も、スペイン語と同じ SVO となっている¹⁸。

なお、例文中のイタリックはスペイン語の語形を表しているが、指小辞 *-ito* を伴っている点、母音 [o] が現れている点が注目される¹⁹。クスコ・

¹⁷ (1)で見た、エクアドル・ケチュア語における対格接尾辞の「脱落」は、この構文に特有のものであると思われる。一般にエクアドル・ケチュア語では対格接尾辞の「脱落」は許容されないと思われる。

¹⁸ ケチュア語は一般に SOV 言語であると考えられているが、実際には語順はかなり自由である。従って、スペイン語の影響があることを明確に示すためには、頻度を考慮に入れる必要がある。

¹⁹ クスコ・ケチュア語であれば、(11)の *niñito* は *niñucha* で現われるはずである (*-cha* はケチュ

ケチュア語では、スペイン語の指小辞 *-ito* は借用されていない。すでに指摘したように、Adelaar (2004: 258) によれば、ペルー中部ではいくつかの変種が消滅の危機にあるという。Sanchez (2003) が挙げるウルクマヨ・ケチュア語とラマス・ケチュア語の例も、スペイン語化の途上にある例と考えられるかもしれない。

以上、クスコ・ケチュア語の対照事例として、エクアドルの *Media Lengua* とペルー中部の事例を見た。クスコ・ケチュア語では語彙の借用はそれほど多くないが、文法においていくつかスペイン語の影響が観察される。エクアドルの場合、*Media Lengua* のベースとなるエクアドル・ケチュア語で、やはりスペイン語の影響がいくらか見られるが、クスコ・ケチュア語に見られる複数接尾辞の借用、前置詞の借用、および従属節構造の変化については報告がない。一方 *Media Lengua* は、文法的にはエクアドル・ケチュア語とあまり違いがないようであるが、語彙がすべてスペイン語から来ている特異な例を示している。最後に、ペルー中部でバイリンガルが話すウルクマヨ・ケチュア語とラマス・ケチュア語は、文法・音韻・語彙面すべてにおいてスペイン語の影響が強く見られる。

4. 教育と言語保持

ここではまず、ペルーにおいてスペイン語とのバイリンガルの増加を引き起こしている教育の状況について述べる。そして、ごく最近の教育改革が、ケチュア語保持に寄与する可能性について検討する。

Adelaar (2004) では、先住民語に関する言語政策について、いくつかのパターンが述べられているが、ペルーの事例はここでいう “*transitional model*” に相当するといっていいただろう。Adelaar (2004: 606) は次のように述べる。

In transitional models the non-dominant

語の指小辞)。

language has an intermediate role, primarily to help the child adjust to the dominant ‘national’ culture and language, which are diffused through the schools. Often use of the Amerindian language will be limited to a few subjects in the first three years or so.

筆者は、ペルー共和国クスコ県キスピカンチス (*Quispicanchis*) 郡で教育関係者に聞き取り調査を行なったが、ケチュア語が話される地域での学校教育におけるケチュア語の扱いは以下のようなものである。すなわち、小学校に入学すると、最初の 2~3 年ほどは主にケチュア語ですべての授業が行なわれる。それが徐々にスペイン語主体へと移行し、6 年生になるころにはすべての授業がスペイン語で行なわれるようになるという。すなわち、ケチュア語保持のための教育は行なわれていない。児童は家庭ではケチュア語を話す、学校ではスペイン語を使用することが多くなる。また、両親の多くは子供がスペイン語を話せるようになることを望んでおり、ケチュア語を話すことを望んでいない。

さらに、最近の教育改革により、3 歳から始まる幼稚園が半ば義務化された。これは、幼稚園へ通っていないければ、小学校への入学が許可されないというものであるという。教育はケチュア語で行なわれているが、必ずしもすべての教員がケチュア語を話せるわけではない。さらに、幼稚園ではアルファベットが導入されるが、母音 e、o などケチュア語表記には用いられない文字もある。そのような文字の学習においては必然的にスペイン語の語彙が利用されるため、児童は従来よりもかなり早い段階でスペイン語に接することになる。

教材の問題もある。国が開発したケチュア語教科書は、必ずしもそれぞれの地域方言に対応していないため、ほとんど利用されていないようである。筆者が視察したキスピカンチス郡の幼稚園で

は、置かれていた教科書はクスコ・ケチュア語のものではなく、利用されていなかった。

一方で、非先住民系の児童に対しても、先住民語の教育が義務化されるという動きもあった。例えばクスコ市内では、小学校3年生以上のすべての児童に対し、ケチュア語教育が行なわれるようになった。ただし、授業が週あたり1回程度しか行なわれていないことや、前述した教材不足、教員不足などの問題もあり、学校教育がケチュア語習得に寄与する、という状況には至っていない。むしろ、ペルーの文化的な背景となるインカ族が公用語として使用していたケチュア語を学ぶ、という象徴的な意味しか持っていない。このように単なる象徴的な取り組みにとどまるのか、先住民語保持に寄与するのか、ペルーの状況を、今後とも注視していく必要がある。

5. おわりに

本稿では、スペイン語との接触によりケチュア語が現在どのような状態にあるのか、クスコ・ケチュア語を中心に述べた。また、社会的な背景についても扱った。

クスコ・ケチュア語では、社会の変化に伴いスペイン語との接触機会が増大している。その結果、スペイン語の影響は語彙や音韻にとどまらず、形態や統語にも見られる。また、話者の多くが言語の継承に積極的ではなく、安泰であるとは言えない。しかしそれでも、クスコ・ケチュア語は依然として一定の活力を保っており、今後急速に話者数が減少したり、急激にケチュア語が変容することはないと考えられる。これに対し、ペルー中部ではケチュア語話者数の急減や言語体系の大幅な変容が観察されており、ケチュア語が話されなくなってしまう可能性が危惧される。

ペルーでは先住民語教育が義務化されたが、現実として、教育が先住民語保持に役立っているとは言えない。今後、教育が充実して言語保持に寄与するようになるのかが注目される。一方で、言

語教育のためにはある程度の標準語化も避けられない。様々な地域変種ごとに教材を準備し教員を養成することは困難であるからである。仮に先住民語教育が一定の成果を収めるようになったとしても、そのことがケチュア語にどのような影響を与えるかも注視しなければならないであろう。また、ペルーに比べ、ケチュア語の均質性が高いエクアドルやボリビアのほうが、ケチュア語教育が成功する可能性が高い。三国で先住民語教育がどのように進んでいくのかも見ていく必要がある。

今後は、クスコ・ケチュア語の変容がどのように進むのか、継続してデータを収集し、観察していきたいと考えている。また、本稿では扱うことができなかったが、ボリビアのコチャバンバ（Cochabamba）の事例がクスコ・ケチュア語との対照事例として興味深い。コチャバンバ・ケチュア語は、クスコ・ケチュア語と同じ南部ケチュア語であるため、言語的に似ている。しかし、「ケチュニョル（quechuñol）」と呼ばれるほど、スペイン語の影響を受けている。また、言語教育においても様々な取り組みが行なわれている。対照事例を増やししながら、ケチュア語の変容について総合的に考えていきたいと考えている。

略号一覧

- 1: 1 人称
3: 3 人称
ACC: 对格 (accusative)
ADV LZ: 副詞化接尾辞 (adverbializer)
CAUS: 使役 (causative)
DAT: 与格 (dative)
FUT: 未来 (future)
N: 名詞 (noun)
NEG: 否定辞 (negative)
NMLZ: 名詞化接尾辞 (nominalizer)
PRG: 進行相 (progressive)
PL: 複数 (plural)
TOP: 主題 (topic)
v: 動詞 (verb)

参考文献

- Adelaar, Willem, with the collaboration of Pieter Muysken (2004) *The Languages of the Andes*. Cambridge University Press.
- Ebina, Daisuke (2012) Sobre el contacto lingüístico de quechua sureño y castellano. “INTELECTUALES JAPONESES REFLEXIONAN SOBRE BOLIVIA” La Paz: CIDES-UMSA (口頭発表) 2012/8/21.
- 細川弘明 (1988) 「ケチュア語族」 亀井孝、河野 六郎、千野栄一 (編著) 『言語学大辞典第 1 卷』三省堂. pp. 1589-1608.
- Mannheim, Bruce (1991) *The Language of the Inka since the European Invasion*. University of Texas Press.
- Muysken, Pieter (1981) Halfway between Quechua and Spanish: The Case for Relexification. In Arnold Highfield and Albert Valdman (eds.) *Historicity and Variation in Creole Studies*. Ann Arbor: Karoma. pp. 54-78.
- Muysken, Pieter (1997) Media Lengua. in Sara Thomason (ed.) *Contact Languages: A Wider Perspective*. Amsterdam: John Benjamins. pp. 365-426.
- Muysken, Pieter (2009) Gradual Restructuring in Ecuadorian Quechua. In Rachel Selbach, Hugo C. Cardoso, and Margot van den Berg (eds.) *Gradual Creolization: Studies Celebrating Jacques Arends*. Amsterdam: John Benjamins. pp. 77-100.
- Sanchez, Liliana (2003) *Quechua-Spanish Bilingualism: Interference and Convergence in Functional Categories*. Amsterdam: John Benjamins.
- Weber, David (1989) *A Grammar of Huallaga (Huánuco) Quechua*. University of California Press.
- Winford, Donald (2003) *An Introduction to Contact Linguistics*. Malden and Oxford: Blackwell Publishing.

※本研究の調査は、科学研究費補助金若手研究 (B) (課題番号 22720171 「ケチュア語とスペイン語の言語接触—今まさに起こりつつある変化—」) によって行なった。